

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Tell) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

第 2 回 大学図書館員京都研究集会
研究報告抄録号

I

立命館大学雑誌コンテンツ検索システムについて (松原修)

II

雑誌価格の高騰と図書館の対応

—窮迫する米国の大学図書館の内情から— (篠原俊夫)

12月4日(土)、立命館大学末川記念会館において第2回大学図書館員京都研究集会が開催され、3本の研究報告と見学が持たれました。参加者は16名とやや少なめでしたが、非常に内容の充実した研究集会として参加者間では大変好評でした。本号では、各報告の抄録を報告者にお願ひし、参加出来なかつた方々に、密度の濃い「再放送」でお届けします。じっくりと味わってください(尚、もう1本竹村心氏の「教科書の歴史とその所在を求めて」をお送りする予定でしたが、ご本人の事情で本号に掲載することが出来ませんでした。これにつきましては、次号以降に掲載する予定です)。

立命館大学雑誌コンテンツ検索システムについて

松原 修 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス・メディアセンター)

はじめに

立命館大学図書館では、1990年4月にRUNNERS (立命館大学学術情報システム) が稼働して以来、利用者サービスの向上に向けて様々な取り組みを行って来ました。

とりわけ、1993年9月から洋雑誌のコンテンツ検索サービスを開始し、全学に配置されている121台の専用端末からオンラインで検索が可能となりました。

そして、さらには、1994年4月からこのコンテンツ検索システムを自宅や個人研究室からパソコンで検索できるように環境を整えるとともに、研究者にあらかじめキーワードを登録して頂き、そのキーワードに該当する新着のコンテンツ情報をリスト出力するサービスも開始します。

そこで、全国でも例を見ない、このコンテンツ検索システムの概要をご紹介するとともに、実際に端末に触れて頂こうと思い、第2回大学図書館員京都研究集会でこのテーマを設定させて頂きました。

コンテンツ検索サービスについて

①サービス内容

このサービスのもととなるコンテンツ情報は、オランダのSWETS社が作成したものであり、その対象となる雑誌は8,000タイトルです。

これらの情報をMTで購入(1993年分より)し、ローカルシステム上にコンテンツDB及びタイトルDBを構築してRUNNERS蔵書検索システムの一機能として無料で利用者に提供するものです。このコンテンツ情報の更新データは毎週1回のタイミングでSWETS社からエアカーゴで送られてきます。

これによって雑誌の目次に掲載されている論文名、執筆者名、ページ数などの情報を得ることができ、さらには立命館大学の雑誌DBともリンクしているため、該当雑誌の所蔵状況をも知ることができます。

②検索方法

キーワードやタイトル、ISSNから検索することが可能です。詳細画面では、掲載雑誌名、巻号、論題、ISSNなどが表示されます。

また、該当する雑誌の立命館大学での所蔵を知りたいければ、ファンクションキーを押せ

ば、所蔵の画面に展開されます。(立命館大学で所蔵している洋雑誌のコンテンツの収録率は、41.1%です。)

参加者に実際に触って頂いて、感想をお聞きしますと、「使いやすい」、「よくできている」との声が多く、大変好評でした。

おわりに

近年、大学における教育・研究のありかたが急激に変化して行くなかで、図書館自体もその変革が求められて来ています。

従来、図書館は蔵書を中心とした資料管理に力を入れてきましたが、これからの図書館は教育・研究を支援するための”資料へのアクセス”に力点を置くべきであり、このことを実現するための環境をいかに整備し、充実させていくのが重要な課題となり、そこに図書館の真価が問われることとなるでしょう。

雑誌価格の高騰と図書館の対応

—窮迫する米国の大学図書館の内情から—

篠原 俊夫 (京都大学法学部図書室)

1. 雑誌価格がなぜ問題なのか

相次ぐ予算の削減に追い打ちをかけるような資料費の高騰がアメリカの大学図書館の行く先を不透明なものにしている。資料費のなかでも、大学図書館の場合、特に雑誌購入経費の占める比率が高く、雑誌価格の問題を考慮することが大学図書館の運営をめぐる諸問題を考えることだと言えるくらい、大きな意味をもつにいたっている。

名門コロンビア大学に端を発したライブラリー・スクールの閉鎖は、現在にいたるまで続いており、好転の兆しは見えない。しかし、厳しい状況下にあっても、アメリカの大学図書館員の士気が衰えたようには見えないし、専門職制度の根幹がゆらいでいるわけではあるまいと考えてきた。しかし、危機の深刻さは、やはり、これまでと根本的に違っているようだ。大学財政の基盤の危うさが最も見えやすい形で、大学図書館の経営的危機となってあらわれている。専門図書館において、雑誌は生命線のはずであるが、それなりふ

りかまわぬ図書館の延命策のなかで、形骸化したお題目にすぎなくなったようである。

2. 雑誌価格は、どのように推移しているか

雑誌価格の高騰は、深刻な問題ではあるが、大学図書館の予算規模が雑誌価格の上昇に見合うだけ増大していれば、大した問題は生じなかったとも言える。雑誌価格は高騰したのに、図書館の予算はむしろ削減されたところにこそ、今日の危機的状況がうまれた原因がある。California Polytechnic State University Library の例が、College & Res. Lib. News, March 1993. p.123 に報告されている。同図書館のディーンであるDavid Walch 手になるDean's Columがそれであり、そこには最近5年間の図書館活動の推移が簡潔に述べられている。

- ① 5年前、図書館の購入する単行本の平均価格は、34.92ドルであったが、今日では52.08ドルである。約49%ほど価格は上昇している。
- ② 5年前、購入雑誌の平均価格は、平均で128.55ドルであったが、今日では、それは233.22ドルまで上昇している。約82%の値上がりである。
- ③ 5年前、図書館は3,313タイトルの雑誌を購入し、総額で426,000ドルを支払った。今日、購入タイトル数は、2,983タイトルに減少し、逆に支払い総額は、700,000ドルにまで上昇している。約82%のコスト増である。
- ④ 5年前、図書館は14,608冊の単行本を購入した。この報告が書かれた時点で、図書館は、最近の3ヵ月間、一冊の単行本も購入していない。
- ⑤ 5年前、職員数はフルタイム換算で70.5人いた。現在は57人で約24%減である。

上記の報告の数字をみるだけで、容易でない事態だと了解できる。しかし、大学図書館の予算そのものが、この5年間で13%削減されたとあれば、当然の帰結とも言える。

3. 価格はなぜ高騰したのか

アメリカ図書館協会は、毎年periodical price index によって、雑誌価格の推移を報告している。1993年度版によれば、この10年間で雑誌価格は、平均9.4%づつ上昇している。特に、1991年、1992年については、それぞれ11.7%、12.2%という大幅な上昇率を記録している。なぜ雑誌価格がここまでげしく高騰したのか。結論から言えば、信頼にたいする原因の指摘はどこにも書かれていない。複合要因がいくつか上げられているが、いささか疑わしいものもある。厳密さに問題はあるが、以下一般的にあげられている雑誌

価格高騰の原因を揚げてみる。

- ① 自然科学分野に顕著な例がみられるような学問の細分化がすすみ、それに応じて雑誌のタイトルも増大するという説。
- ② 大学教員を脅迫して止まない「出版か、さもなくば破滅か」という声がある。
出版は、取り敢えずステイタスの保障や、さらなるプロモーションを要求する材料となる。厳しいレフェリー制度を敷く水準の高い学術雑誌に投稿された論文が何度かの書直しを要求され、苦心の末、採用されればよし、仮に不採用となっても、あきらめず、採用されるまで別の雑誌に投稿を続ける。当然、次第にランクは低くなるけれども、出版されればとりあえず業績にはなる。かくて、論文数は無限に増大し、雑誌タイトル数は飛躍的に増加する。かくして、極めて狭い範囲でしか流通しない雑誌が、出版されて、図書館が唯一の講読者となることも稀ではない。一冊あたりの単価は当然高いものになる。
- ③ 単行本より雑誌を出版する方がリスクが少なく、容易に利益が見込める。従って、安易な出版がおこなわれやすい。
雑誌の講読者の多くは、予約講読者であり、あらかじめ読者数が把握できること、一度予約講読者になると継続することが多く、正確な固定読者数を前提に安定した出版が保障され、出版社の意向に沿った価格設定が可能である。
- ④ 雑誌を出版するうえで、採算ラインが一定であると仮定すれば、購入のための予算が削減されて、購入を中止する図書館や個人が増加すれば、一冊あたりの単価はむしろ上昇する。一種のゼロサムゲームであり、講読者の減少がさらなる価格の上昇を引き起こす原因なるという考え方もできる。

4. 図書館は、雑誌価格の高騰にどのように対応したか

資料費や人件費の上昇に応じた図書館予算の増額があれば、問題の生ずる余地がないことは、すでに述べたとおりである。実態は、予算増どころか、現状維持もかなわず、削減を強いられるのが普通である。後は、精々、やりくりと工夫によってなんとかしのいでゆこうということになりがちである。そこからやりくりの一端として、モノグラフ用経費の流用ということも考えられる。雑誌はなににより継続購入することに意義があり、予算が苦しいからと言って、安易に購入を中止できない事情があるからである。次の段階として、見直しという名目のもとに、購入タイトル数を削減することで、総経費の圧縮をはかる。即ち、コアとなる雑誌は継続購入するが、利用頻度の低い雑誌は、購入を中止する。あるいは、近隣の大学図書館間で共同購入や分担収集を試みることもある。

しかし、これらの方法は、根本的解決にはならない。では、何をすればいいのか。ここから、論文の生産者たる大学教員が自ら出版を手懸けよという少数意見も生まれてくる。

あるいは、学術雑誌の論文審査を厳しくして、出版に値しない論文を淘汰せよという意見もあるが、それが出版される雑誌のタイトル数の削減につながるとは考えられない。

5. 雑誌見直しの手順

購入雑誌のタイトル削減は最良の手段ではないが、多くの大学図書館で財政難を乗り切る対症療法として行使されていることは、日本もアメリカも同じである。

ここでは、Virginia Tech. Blacksburgで実施された雑誌の削減作業の経過報告を見てみよう。それは、13のステップからなる綿密な作業手順をふんで実施されたものである。

この大学図書館が雑誌の購入タイトル数の削減に踏み切った背景には、州財政の未曾有の危機から派生した大学予算の削減があり、1991年分について、現在のタイトル数を維持するためには、モノグラフ用の経費の40%を流用しなければならない事態に追い込まれたためである。プロジェクトを終了すべき時点から逆算して、6ヵ月前から、雑誌コレクション全体の見直しに着手した。見直しの規模は、購入中止タイトル数にして、1250タイトル、金額にして30万ドルにおよぶ。

作業は、利用度調査から始められた。1990年の春の学期に、アト・ランダムに選んだ9週間の中央図書館における雑誌の利用を調査した。当初、未製本雑誌を含む全ての雑誌を調査対象にしたが、利用に障害があり、調査範囲を製本雑誌の館内利用に限定した。

作業に着手するに当たって、留意しなければならないことは、先に述べたように、十分なゆとりを見込んだ作業日程と、業務内容に精通した専門家を1名、プロジェクト終了まで配置することである。この担当者は雑誌見直し作業の全過程に参画し、その間は、完全に通常業務を離れて、ガイダンス、指導などに専念することが必要である。

作業に用いる全てのデータは、コンピュータに入力して、種々の必要に応じて即座に文書作成を可能にしておくこと。

削減対象となる雑誌タイトルを明らかにして、関係者の関心を高めること。準備段階を経ずに、いきなり教員に削減すべきタイトルの選定を依頼することは、時間がかかるうえに、個人的な利益のみを優先してタイトルを選定することもあり得る。それを避けたいければ、図書館サイドが主導権をもって、教員を巻き込む方式で進めるのがよい。たとえば、12%程度を削減したいとき、思い切って20%の削減リストを示し、その後、きめ細かく折衝しながら、削減タイトルを減らして、教員が気持ちよく削減に協力する形にもってゆくなどの工夫を試みることも大切である。

削減の効果をあげ、最終的に必要なタイトルを維持するための資源をひねり出すためには、図書館が提案する購入中止タイトルの金額が各研究者の専門分野にとって、妥当であるか、場合によっては、それを上回る金額である必要がある。費用あたりの効果の分析を行なうと購入中止最有力のタイトルが経費と効果の観点から、ベストの選択とならない場合がある。そこで、各研究分野に対して、削減対象にあげられた雑誌タイトルについて、優先順位をつけることを認める。削減の可能性の高い順番から列举すると、以下の通り。

- 1: もっとも削減の可能性の高いタイトル。削減の対象になっても、文句のつけようの

ないもの。

- 2 : 教員と図書館の双方が保留とするもの。場合によっては、削減の対象から除外する可能性もあるもの。
- 3 : どうしても削減せざるを得ないとき以外は、対象としない。
- 0 : 削減リストにのっても、教員の希望により、事実上、無条件で救済されるもの。

これは、教員の雑誌に対する評価を図書館側が真摯に受けとめていることを理解してもらおうと、効果がある。

上記の過程を経て、削減対象の雑誌タイトルを一本のリストにして、プリントアウトして、学内の教員に配布する。教員は自由に自己の関係する分野の削減対象となったタイトルについて、意見を書き加えて、図書館の担当者に返す。直接、口頭で意見を述べることも自由である。教員から出された全ての意見と条件を勘案し、各分野の専門のプリオグラファーの意見をも考慮して、最終的に購入中止タイトルを決定する。

作業に係わる理念をスローガン風に言えば、柔軟であれ、かつ正直であれ、決定のための基準を豊富に準備し利用せよ、将来の再度の削減を念頭に置きつつ、現在の削減を実行せよ、最後に結果を周知させよ、ということになる。

6. 購入雑誌の削減は、図書館にどんな影響を与えたか、あるいは今後は？

購入雑誌のタイトルを削減した結果について、図書館サイドの評価は、コレクションの内容も向上し、教員の図書館に対する理解が深まったとしている。削減そのものは、教員にとって好ましいことではないにも拘らず、敵対する教員が少なかったのは、教員自身が予算削減からくる全面的な窮状（地位、報酬、旅行、支給物）に慣らされていて、痛みを共有する感覚があったからである。種々の基準を弾力的に運用し、教員の相談に親身に対し、機械的判断を避けることで、ダメージを最小限に止めることができたのである。

7. 購入を中止した雑誌の利用にどう対応するか

購入を中止した雑誌は、相対的な利用度は低くても、利用はある。利用がそれを必要としたとき、どう対応すべきだろうか。

教員の側から見て、手っ取り早い方法は、同じ大学の同僚や他大学の研究者仲間等の私的コネクションを通じて、必要な文献を入手することである。

次に、図書館の提供するInterlibrary Loan (ILL) Service や Document Delivery Service (DDS)によって入手することが考えられる。その際、サービスは有料か、無料かあるいは有料としても、利用者がどの程度負担すべきなのか、などのことが問題となる。

DDSに関しては、商業ベースのものも含まれるため、有料か無料かという問題は、図書館の財政事情の直接の影響を被る点から、難しい問題もあるのだが、アメリカの大学図書館では、原則として資料提供にかかわる費用は、図書館が負担すべきだという考えが支配的である。この原則に従えば、予算難から削減した雑誌に掲載された論文を利用者が必要とする場合は、それを現物貸借の形であれ、複写物の形であれ、図書館の負担で文献を入手し、無償で利用者に提供すべきだということになる。

利用者の側にも、図書館サービスが無償であるべきだという確信があり、図書館が財政難を理由に安易にサービスの有料化をはかっても、合意を得にくい事情がある。

雑誌タイトルの見直しと削減は、ILL/DDSの利用に加えて、オンラインでのフルテキスト・データベースの利用をも考慮している。図書館と利用者の距離が次第に遠くなり、間接的な関わりしか持てなくなる状況が拡大するのでは、という危惧を図書館員をとらえつつある。図書館の文献サービスが有料なら、研究室の端末を操作して、研究者が自前で、DDSサービスを受け、手元に文献を取り寄せる過程にいかなる形でも、図書館が介在することができない。図書館の存在価値を問う声がと図書館の内外から聞こえてくるのは、必至であろう。大学図書館は、それにどう答えるべきかというのが、緊急かつ現在の問題であり、財政難の克服という根本的課題が解決しないかぎり、今後とも最大の課題である。

8. おわりに

必要な資料を自館だけでは維持できないという状態がさらに深刻化するなかで、様々な模索がはじまっている。しかし、本来、苦肉の策から生まれたものを「所蔵」からアクセスへの転換などという安易な言葉で正当化することは、避けるべきであろう。仮に、それが Electronic Document Delivery のような新しい選択肢であっても、まだ、装いがあたらしいだけで、評価が確立しているわけではない。数あるデータベースのうち、もっとも信頼できるものはなにか、それぞれのデータベースごとの長所、短所がどこにあるのか、それらのデータベースを利用可能にするための機器を設置するなどの初期投資にどれほどの経費が必要なのか、それら諸々のもっとも基本的な問題に答えることは、今の段階では不可能である。図書館は今、緒についたばかりの新しい情報サービスの可能性を必死に見極めようとしているのだが、あまりに急激な変革の過渡期にあって、確たる解答を見出すに至っていないのである。先行きは不透明で、混沌としているが、それはそこから、何物かが創造されるかもしれない可能性を含んだ混沌だと考えたい。

なにより、先にも述べたように、購入雑誌のに見直しは、あくまで対症療法であり根本的解決とはなりえない。雑誌を含めて、必要な全ての資料を購入できる予算を大学図書館が確保することにこそ、図書館員の奮闘すべき目的はおかれるべきではないかという根底的な批判に対して無力であることも正直に認めなければならないであろう。

(参 考 文 献 - 覧)

1. Meetings the serial cost problems : a supply-side proposal / by Robert R. Boyce. *American Libraries*, March, 1993. p. 272
2. Academic libraries as information consumers : implications for policy making / Marilyn J. Martin. *Journal of Academic Librarianship*, v. 17, no. 2, p. 93-98
3. Thirteen steps to avoiding bad luck in cancellation project / by Paul Metz. *Journal of Academic Librarianship*, v. 18, no. 2, p. 76-82
4. The art of projecting : the cost of keeping periodicals / by Lee Ketcham & Kathleen Born. *Library Journal*, Apr. 15, 1993. p. 42-48
5. Impact of periodicals cost escalation on small and medium-sized academic libraries : a survey / Stuart L. Frazer. *Journal of Academic Librarianship*, v. 18, no. 3, p. 159-162
6. Price analysis and the serials situation : trying to solve an age-old problem / by Barbara Meyers and Janice L. Fleming. *Journal of Academic Librarianship*, v. 17, no. 2, p. 86-92
7. Periodicals collections in college libraries / improving relevancy, access, availability / by Thomas G. Kirk. *Journal of Academic Librarianship*, v. 17, no. 5, p. 298-301
8. Allocating the material funds using total cost of materials / by Carol Cubberley. *Journal of Academic Librarianship*, v. 19, no. 1, p. 16-21
9. Electric document delivery : new options for libraries / by Ronald G. Leach and Judith E. Tribble. *Journal of Academic Librarianship*, v. 18, no. 6, p. 359-364
10. ILL/document delivery as an alternative to local ownership of seldom-used scientific journals / by Elizabeth P. Roberts. *Journal of Academic Librarianship*, v. 18, no. 1, p. 30-34

11. Inflation, budget cuts, and faculty needs / David B. Walch. *College & Research Libraries News*, March 1993, p. 125
12. Periodical price index for 1993 / Adrian W. Alexander and Kathryn Hammell Carpenter. *American Libraries*, May 1993, p. 390-442
13. Scholarly publication, academic libraries, and the assumption that these processes are really under management control / Herbert White. *College & Research Libraries*, July 1993, p. 293-301
14. Priorities for the research library budget : a humble proposal / by Herbert S. White. *Library Journal*, March 15, 1993, p. 52-53
15. Improving return on investment : a proposal for allocating the book budget / by Denis P. Carrigan. *Journal of Academic Librarianship*, v. 18, no. 5, p. 292-297

近畿 5 支部新春合同例会報告

恒例の近畿 5 支部新春合同例会が、2月5日(土)の午後、大阪の府立文化情報センターで催された。大阪市大商学部教授の石原武政氏による「大学と商店街の組織はどこが違うかーわがままな組織を動かす方法ー」と題する講演があって、参加者は、大学図書館のなかで、人を組織し、動かす難しさを思いおこしながら、なるほどとうなずいたり、それはちがうと異義申し立てしたような顔があったりで、それぞれに受けとめておられるようであった。商都、浪速ならではのしたたかさと柔軟さを感じさせるところがなにより、興味深かった。講演会の後は、これも恒例の懇親会が、堂島の「志河」という相撲料理の店で開かれた。私学の入試時期と重なってしまったこともあり、京都支部からの参加者は6名にとどまったが、大阪支部の頑張りもあって、全体としては、30数名の参加者があり開催時期を考慮すれば、まずまずの盛況であった。(篠原)